第五部でタイ国を北部，中央部，東北部，東南部，半島部にわけ，地形，水系，植生，母材，土壌，灌漑，農業等．その叙述は多岐にわたっている。色と土性を示したのみのものではあるけれども土壌断面の記述も多い。中央部，東南部，半島部については既に別に報告書を出しているため，簡単な記述にとどまっているが，北部と東北部については豊富な記述がなされ，殊に東北部については，著者のフィールドノートから，一寸刻みの調査行程間での観察が刻明に書かれており，ほぼ同じコースをかつてジープで走りまわった私にとっては非常に興味深い。

この報告から我々が知り得るものは要約すれば次の2点になるだろう。

1　タイ国における土壌の調査・分類のこれまでの成果

2　この分類にもとづいた土壌型と土地利用の関係の概要。

なお，この報告を縮小再編した小冊子（Robert L. Pendleton & Sarot Montrakun: *The Soils of Thailand*, 22p.）が1960年に出版されている。

著者の興味のポイントが土地利用の面にかたむいている為に，土壌の生成，分類，肥沃度といった土壌学自体の面での掘り下げが行われていないのは当然かもしれないが残念だ。この報告書を私にくれた Mr. Sarot Montrakun は温顔をほころばせて言ったものだ，ペドロジーはエダフオロジーに奉仕すべきなのだ，と。　（古川久雄）

Александр А. Губер: *Библиография юго-восточной Азии. Дореволюционная и советская литература на русском языке оригинальная и переводная.* Издательство восточной литературы, Москва, 1960. 212p.

本書は1964年4月24日京都大学を訪問したモスクワ大学教授アレクサンドル・A.グーベル博士から京都大学東南アジア研究センターに寄贈されたものである。グーベル教授はインドネシア，ベトナムをはじめ東南アジア全域にわたる著書や論文を多数執筆しており，ソ連における東南アジア研究の最高権威の一人である。本書の編集は，A. M. Grishina を中心に，M. I. Nefedov, D. A. Birman, S. M. Makarova, M. A. Lobyntseva, V. A. Kozhevnikov, V. I. Iskol'dskij, G. A. Andreev, Ju. G. Aleksandrov, S. I. Ioanisjan, A. M. Shilkov および V. I. Kornev ら12人のソ連学者によって行なわれた。

本文212頁の本書には3,752の文献があがっている。本書の構成は，12章に分かれ第1章は，(1) マルクス・レーニン主義の創始者たちが東南アジアについて書いた文献，(2) ソ連政府および党の東南アジアに関する刊行物，(3) 文献目録，(4) ソ連における東南アジア諸国の研究史，(5) 東南アジア諸国に関する一般文献および，(6) 地理，(7) 人種，(8) 歴史，(9) 経済，(10) 文化，(11) 言語，(12) 宗教に関する文献を掲げている。

第2章以下はロシア語のアルファベット順で地域別に分かれており，第2章　ビルマ，第3章　英領北ボルネオ，第4章　ベトナム，第5章　インドネシア，第6章　カンボジア，第7章　ラオス，第8章　マラヤとシンガポール，第9章　サラワク，第10章　タイ，第11章　ティモール，第12章　フィリピンとなっている。地域別文献の量によって，ソ連における研究の関心がどの地域に向けられているかがほぼ推察できる。すなわち，最も文献が多いのはインドネシアの884とベトナムの846とであって，他はずっと少なく，ビルマの324，マラヤおよびシンガポールの252，フィリピンの222，タイの142という順になっている。ソ連の研究がインドネシアとベトナムとに集中されていることは，色々な意味で興味深い。政治的に不安定で，ソ連の対外政策にとって重要な国々ほど，ソ連の研究者の関心をひいているといってもいいすぎではなかろう。1950年代末までに発表されたソ連の東南アジア関係の研究が一望の下に見渡せるという点で，本書はきわめて有益な文献目録である。グーベル教授の御好意と，教授をセンターに紹介された，京都大学人文科学研究所貝塚教授および日比野助教授の御高配に心から感謝し，京都大学東南アジア研究センターが今後国際的な学術交流に寄与することを祈念したい。

（猪木正道）